

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

マハティールとリー・クアンユー

シンガポール分離を決めた論戦

金子芳樹 (獨協大学教授)

マハティールは2003年までの23年間にわたり、リー・クアンユーは1992年までの33年間にわたり、それぞれマレーシアとシンガポールの首相の座にあった。双方ともにアジア史に名を残す屈指の政治指導者である。すでに政治の最前線からは退いた2人だが、いまだに意気軒昂たる様子で言論を繰り出し、一定の政治的影響力を保持している。

両者は現役の首相時代にもしばしば論戦を交えたが、じつは歴史をさかのぼると、一つの議場で与野党に分かれて熾烈な論争を展開した時期がある。2人の因縁の対決は、後のマレーシア・シンガポール両国の政治的成り立ちを決める重大なバトルであった。

時は、シンガポールが1963年9月にサバ、サラワクと共にマラヤ連邦に加盟してイギリスからの独立を果たし、マレーシア連邦14番目の州となって、州内選出の議員をクアラルンプールの連邦議会に送り込んでいた時期である。シンガポール州政府与党の人民行動党(PAP)は、党首リー・クアンユーを筆頭に野党として連邦議会に乗り込み、マラヤ時代から引き継がれたマレー人優先主義に異議を唱えた。人種、宗教、言語にとらわれない平等主義を採用すべきと主張して、UMNO(統一マレー人国民組織)を中心とした与党連合に挑戦したのである。

この時リー・クアンユーは、マレーシアの真の土着民はオラン・アスリだけであり、それ以外の住民は、華人やインド系住民に限らず、マレー人でさえもせいぜい過去千年以内に移住してきた移民の子孫に過ぎないと主張し、マレー人がブミプトラ(土地の子)であるとの前提に立ったマレー人優遇政策を舌鋒鋭く批判した。

華人が圧倒的に多数を占めるシンガポールの立場からマレーシア全体のルールを変えようとするこのような主張は、それまでの政治の前提もしくはタブーに挑戦する過激な主張であり、もちろんUMNOをはじめとする半島部の与党から激しい非難を浴びた。そして

その時、対PAPの急先鋒に立ったのが当時売り出し中の少壮政治家、マハティール・モハマドであった。

マハティールは議会の演説の中でリーを、「マレー人をお抱え運転手としてしか使っていないような華人中心の環境の中で、島国根性で固まった利己主義的かつ傲慢な華人の典型」と非難し、同僚のUMNO若手急進派議員とともに、PAPとリーをマレー人の歴史と文化を冒瀆する反マレー主義者と痛烈に批判して対抗した。

マハティールらが、リーの逮捕・拘束まで要求する中、当時首相であったトUNK・アブドゥル・ラーマンは、「討論はひどい口論となり、ついには相手の欠点を探すだけの喧嘩になってしまった」と嘆き、このような舌戦に触発されて民族間の緊張が高まることを憂慮して、ついにシンガポールの切り離しを決定したのである。

2つの国の形を決めたマハティールとリー・クアンユーの激しい論戦は、民族問題をめぐる両者、両民族、そして両国の立場の違いを如実に表している。

なお、PAPが半島部で活動していた間に設立された支部は、分離独立後、民主行動党(DAP)と名称を変えてマレーシアの政党として登録され、その後も同国の野党として平等主義の立場から非マレー系住民の権利を代弁し続けている。その意味では、当時の論戦は、形を変えながら現在に引き継がれているといえよう。

<筆者紹介>

1957年、静岡県生まれ。慶應義塾大学大学院法学研究科修了。法学博士。松阪大学助教授、教授などを経て現職。専門はマレーシアを中心とした東南アジアの政治・国際関係。著書に『マレーシアの政治とエスニシティ』、『アジアの国家とNGO』(共著)などがある。バイクで各地を回りながら取材するスタイルで、東南アジア諸国をはじめ世界各国を走り続けてもいる。日本マレーシア学会(JAMS)運営委員。